

幼児の鑑賞教材としての落語の可能性

—落語「平林」鑑賞を通して—

荒川 恵子

(京都女子大学)

林家 染雀

(上方落語協会)

太田 公子

(独立行政法人 情報通信研

究機構 知識創成コミュニ

ケーション研究センター)

はじめに

荒川2004において、幼児の鑑賞指導について考察した際、幼児は、音声の抑揚や音楽におけるリズム、テンポ、音高、音量など諸ファクターの変化に非常に敏感であり、強い興味を抱くことを指摘した。それとの関連が推測される事象として、2003（平成15）年4月から現在もNHK教育テレビで放映されている『にほんごであそぼ』（斉藤孝監修）において、創作狂言『まちがいの狂言』の中の謡「ややこしや」が園児には大変な人気であることに興味を持った。これはウィリアム・シェイクスピア（William Shakespeare 1564～1616）作『まちがいの喜劇（The Comedy of Errors）』を狂言師 野村萬斎（1966～）がアレンジしたものであるが、狂言師は子ども達とともに伝統的な発声と独特の謡い回しによって、「ややこしや、ややこしや、私がそなたで そなたが私……」と発し跳ね回って踊り、個性的なパフォーマンスを繰り広げる。子ども達は、ユニークな踊りとともに、狂言師の発する音声のダイナミックなうねりに強い興味を引かれているようである。また、同番組には落語「寿限無」の中の「じゅげむ、じゅげむ、ごこうのすりきれ…」と長い名前を唱える箇所を、木魚でリズムを取りながら、どこまで正確に言えるかを競うゲーム的コーナーがある。この番組の人気により、「じゅげむ」の長い名前を暗誦している園児が多いという。

これらのことから言語の抑揚、言語特有のリズムといった「語り」における音響的、音楽的側面への幼児の興味に着眼することは、音楽の聴き方を学ばせる方法の開発と密接に連動して

いるように思われ、幼児の音楽鑑賞活動に、落語を導入することを試み始めた。落語鑑賞においては、場面状況、登場人物の心理状態、話の論理的な筋道を把握させることと並行して、「語り」における音響的、音楽的側面に着眼させることもできる。園児にとって適切な演目を選べば、受け入れられやすく教育的効果も高いと考えたのであった。本研究では、園児の落語鑑賞における実践報告を通して、その教育的意義を考察したい。

1. 幼児の落語鑑賞における意義について

落語は、一本の扇子や一枚の手ぬぐいを様々なものに見立てて、一人の口演者が話のリズム（間）を微妙に変化させることによって複数の人物の心情を描き分け、簡略化された動作で様々な身体動作を表現する、世界に類を見ない日本固有の芸能形態である。聞き手は口演者の声、口調、表情、しぐさから、落語の記号を読み解き、想像力を働かせ、表象作用によって自分の脳内に自分で物語の映像世界を作りあげる。また集中して聞き、記憶、推理、論理的思考によって話の全容を把握していれば、最終的なサゲ（落語のオチ）の意味を即座に理解して楽しめる。以上のことから、園児の落語鑑賞には、イマジネーションや感性と同時に論理的思考力を育成できる可能性があり、古典芸能文化の継承としての意義と相まって導入の意義が大きいと考える。このような観点から、第1著者の荒川と第2著者の林家染雀は、2002（平成14）年からこれまでに、上方落語を導入したコンサート及び幼稚園訪問演奏会を計7回行ってきた（表1）。

表1 著者らが上方落語を導入したコンサート及び幼稚園訪問演奏会（荒川・林家 2007より転載）

<p>①第2回鑑賞指導研究会MEBAE新春ファミリーコンサート／はめもの紹介&落語「七度狐」／2002年1月14日／京都コンサートホール小ホール／観客約500名／民族音楽，西洋音楽との二部構成の第1部として，40分をはめもの紹介（寄席一番太鼓，バレ太鼓，水音，波音，雨音，雪，幽霊，幽霊の体験学習）及び落語にあてた。</p>
<p>②幼稚園訪問演奏会／落語のしぐさ，小噺&西洋音楽／2004年2月26日／大阪薫英女子短期大学附属かおり幼稚園 年少・年中組／オープニングでは，〈ひょっこりひょうたん島〉，エンディングでは「忍たま乱太郎」の〈世界がひとつになるために〉を一緒に歌った。その間は「寿限無」の名前を一緒に言い，落語の小道具（扇子，手ぬぐい）の役割や，しぐさ（蕎麦，芋を食べる等）を解説し，体験学習をさせた。本格的な落語は聞かせなかった。その後，テーマを「花」に設定し，花にちなんだ作品を聴かせた。わらべうた〈ひらいた，ひらいた〉，端唄〈梅は咲いたか〉歌唱，三味線，ヴァイオリンとピアノによる〈さくら〉の演奏比較を行い，チャイコフスキーの〈花のワルツ〉，プロコフィエフの《3つのオレンジへの恋》より〈行進曲〉，〈世界にひとつだけの花〉なども組み入れた。</p>
<p>③幼稚園訪問演奏会／落語「平林」&西洋音楽／②と同園の年長組／②とほぼ同内容だが，落語「平林」を聞かせた。手や足に持つ扇子（松を描いたもの）をだんだん増やして，最後に立派な松になる〈松尽くし〉も踊った。</p>
<p>④幼稚園訪問演奏会／西洋音楽&締太鼓体験学習，しぐさ解説，落語「平林」／2005年1月26日／京都女子大学附属京都幼稚園 年少・年中組／オープニングは，「忍たま乱太郎」の〈勇気100%〉で始め，〈猫ふんじゃった〉によるクイズ，短調ヴァージョン，いとうたつこ編曲〈オートバイに乗るネコ〉，平吉毅州〈ネコの逆襲〉など様々なアレンジを聴かせて音の表情の変化に着眼させた。その後，〈獅子〉（大阪名物）を「テレン，テレン，テレン，テレン，テレンツクステン…」と唱えながらボディパーカッションさせ，2名の園児に締太鼓の体験学習もさせた。しぐさの解説後，落語「平林」を聞かせた。エンディングは〈マツケンサンバ〉で踊った。</p>
<p>⑤幼稚園訪問演奏会／洋楽&締太鼓体験学習，方言解説／落語「平林」／④と同園の年長組／④とほぼ同内容。鑑賞時間には，いとうたつこ編曲〈ニューオリンズのネコ〉，平吉毅州〈チューリップのラインダンス〉を演奏した。</p>
<p>⑥幼稚園訪問演奏会／邦楽作品紹介，はめもの紹介，落語「七度狐」／2005年3月1日／大阪薫英女子短期大学附属かおり幼稚園 年少・年中組／オープニングは，「忍たま乱太郎」の〈勇気100%〉で始め，エンディングは〈マツケンサンバ〉で踊った。その間は，ピアノ，三味線，鳴り物による〈越後獅子〉を聴かせたあと，能管，三味線，締太鼓，大太鼓の楽器紹介とはめもの紹介（水音，波音，雨音，雪，幽霊）を行い，落語「七度狐」を聞かせた。</p>
<p>⑦幼稚園訪問演奏会／邦楽作品紹介はめもの紹介，落語「七度狐」／⑥と同園の年長組／⑥と同内容</p>
<p>落語演目メンバー 落語 林家染雀(①～⑦)／鳴り物 桂つく枝(①)，笑福亭喬若(⑥⑦)／寄席三味線方 吉崎律子(①) 吉川絹代(⑥⑦)</p>

荒川・林家2007では、表1①⑥⑦において行ったハメモノ（邦楽による効果音）が豊富な上方落語「七度狐」鑑賞における園児の反応を詳細に分析した。ハメモノがある上方落語の鑑賞は、邦楽における音の表象性に関する文化を伝えることができ、邦楽のうちでも言葉を伴った音楽、（歌、語り物）鑑賞への導入としても有効に作用する可能性があることを指摘した。後に、邦楽器、歌舞伎、文楽への興味を喚起し、学校教育で行われる邦楽教育へと連動していければ理想的であると邦楽鑑賞導入期教材としての意義を高く評価して提言した。本研究では、表1②③④⑤において行ったハメモノのない落語「平林」鑑賞を対象として、園児の興味深い反応を丹念に分析することによって、幼児の落語鑑賞における可能性を考察したい。

2. 落語「平林」鑑賞の実践報告

2.1 落語への導入について

園児に落語鑑賞させる前に、導入として【1】しぐさ（年少・年中組 表1②④）、【2】小咄（年長組 表1③⑤）、【3】落語「寿限無」の名称（表1②③）【4】締太鼓（表1④⑤）【5】旦那と丁稚の関係（表1③④⑤）を学ばせた。次に、提示内容と園児の反応を略記する。

【1】しぐさの意味を知らせる

次の内容を提示した。続いて表1④の園児達の反応を記述する。

- ①扇子と手ぬぐいを出し、扇子を箸に見立ててうどんを食べるしぐさをする。
- ②櫓がきしむ音を口で発しながら舟を漕ぐしぐさをする。
- ③手ぬぐいを使って鼻を噛み、自分の咬んだ鼻紙を見るしぐさをする。
- ④焼き芋を食べるしぐさをする。ヘタをとり、皮を剥き芋を食べる一連の動作をする。

上記①では園児達は笑って演者の麺をすする音を喜んでいた。②ではしぐさの前に「ボートに乗ったことがある人」と聞くと手を挙げた園

児が多い。演者である第2著者の目の前の園児が「ボート」と聞いて船を漕ぐ動作をしてみせた。演者が舟を漕ぐしぐさをするとその園児は拍手していた。他の園児達も「船に見えた！」と騒いでいた。③では園児達は、大喜びであった。鼻を咬む音や演者の「うわあ、きたな～（汚い）」という言葉に大きく反応し、「きたなあ！」と口々に連呼して騒然となった。④では園児は「ほんまに食べてる！」と連呼して大喜びしていた。「皮が大好き」という声も掛かった。芋で喉を詰まらせるところでは大喝采が起きた。

表1②では、年少・年中組であることを考慮して、落語をせずに上記①～④のしぐさの説明だけを行った。着物の説明（袴、紋 林家はうさぎの紋）なども加えた。手ぬぐいの林家のうさぎの家紋に大きく反応していた。表1②では、園児を高座にあげて焼き芋を食べるしぐさの体験学習をさせ好評であった。ノンヴァーバルコミュニケーションであるしぐさは、幼児にも難なく理解でき、落語の導入として有意義であった。

【2】小咄によって落語のサゲを知らせる

次の内容を提示した。続いて表1⑤の園児達の反応を記述する。

- ①「おじいちゃんの靴ここにおるで」（和歌山の方言より）
- ②名古屋の方言では「するんですか？」は「せずか？」と言う。例えば「すみません、名古屋の幼稚園に行きたいんですけど」と聞いたら地元の人が「おみゃあさん、幼稚園にいかずか？この道をまっすぐいこまい、道をわたるまい、川を渡るまい、橋を渡るまい」と言うので何もできず困ったという。（名古屋の方言より）
- ③長崎では、返事を「な—い」と言う。例えば、食堂で「Aランチふたつ」と頼むと「な—い」と返事がある。「ないねんて、ほなラーメンふたつ」と頼んでも「な—い」との返事。次々頼んでも「な—い」と返ってくるので、席を立てて帰ろうとすると今までに注文した全て

の料理が並んでいたという。(長崎の方言より)

- ④「はとが何か落としていったヨ」
「フーン(糞)」
- ⑤「向こうの空き地に囲いができたヨ」
「へー(塀)」
- ⑥「あなたは卓球しますか?」「ピンポーン」
- ⑦「ウルトラマンはヤクルト飲みますか?」
「ジョワ!」
- ⑧「ねずみつかまえた!しっぽしか見えてへんけど、このねずみ大きいで」「いや、小さいで」と言ったら「中のねずみがチュウ〜」

ここでは、第2著者が「落語は、座布団を敷いてもらってお話をします。」「(口演者が)右を見たり、左を見たりします。」と説明した後、方言の話をした。方言の話にもって行こうとして、「皆さんは京都に住んでいますね、僕は大阪に住んでいます。」と始めると園児達は口々に、「ぼくは滋賀!」「高槻!」と主張し始めた。この後、大阪には大阪の言葉があるように、他の地方にも地方独特の言葉があると説明し①~③を話した。方言のサゲは園児にはやや難しかったようで、特に②は静まっていた。③は、説明の過程で行った「井上君」「なーい!」に大きく反応し模倣する園児もいた。おそらく同姓の園児がいるのであろう。園児は自分や友達の名を呼ばれると親近感を持つようである。その為、筆者らは、訪問演奏活動の際、なるべく園児の名前を呼ぶように心がけている。その後、小咄④~⑧をした(表1③では小咄④~⑧のみ、表1⑤では小咄⑥⑦は省略した)。園児達は、いずれも理解できたようで賑やかに笑っていた。④~⑧の小咄レベルの内容は、十分に理解できることが分かった。小咄導入は落語の地口の理解につながるであろう。

【3】落語「寿限無」の名前を唱える

表1②③で、「じゅげむ知ってる人はいますか?」と言うとほとんどの園児が元気よく挙手した。「じゅげむをどこまで言えるか、言ってみよう」と促すと年少組から年長組まで、「じゅげむ」の名前を最初から最後まで詰まらずに完

璧に言えた。「じゅげむ」を導入している「にほんごであそぼう」の影響の強さを物語っていた。次に園児らが唱えた言葉を記しておく。

じゅげむ、じゅげむ、ごこうのすりきれ、かいじやりすいぎよのすいぎようまつ、うんぎようまつ、ふうらいまつ、くうねるところにすむところ、やぶらこうじぶらこうじ、パイポパイポ、パイポのシュンリンガン、シュウリンガンのグウリンダイ、グウリンダイのポンポコピー、ポンポコピーのポンポコナアのちょうきゅうめいのちょうすけ
(「にほんごであそぼう」バージョン)

【4】邦楽器に触れる — 締太鼓を使って

表1④⑤では、本学落語研究会の協力を得て締太鼓を叩くコーナーを作った。天神祭りに演奏される大阪俗謡の〈獅子〉を第2著者が指導した。模造紙に太鼓譜を書いて提示し、第2著者は三味線も合わせた。荒川・林家2007でも指摘したが、園児達は三味線の音を非常に好む傾向にある。次に締太鼓を打つリズム練習の際に使った唱歌を記述する。これを唱えながらボディパーカッションも試み、二人の園児に実際に締太鼓を打つ体験学習をさせた。いずれも園児には非常に喜ばれた。邦楽に触れる良い機会を作れたと考えている。ちなみに表1①⑥⑦では〈越後獅子〉の短縮演奏及びハメモノにおける音表象の解説を行った。荒川・林家2007に詳細を記述した。

テレンテレンテレンテレン
テテーンツクスッテン
テンテコスッテンツクテンテン
テテーンツクスッテン
テンテコスッテンツクテンテン
テテーンツクスッテン

【5】旦那と丁稚の説明

いずれの演奏会でも第2著者が年少・年中組には、「今から子どもが出てくる話をきいてもらいます。」と説明しただけであったが、年長

組には、昔は子どもが働いていたと説明した。園児からは驚きの声があがった。「丁稚さんというのは小学校4年生くらいの子どもの、旦那さんというのは社長さんのようなもの」と説明した。概ね理解し、子どもが出てくる話と知り親近感を抱けたようだ。

2.2 園児達に聞かせた落語「平林」の構造と選択理由

園児に聞かせた落語「平林」は、大阪島之内の商家につとめる漢字の読めない幼い丁稚定吉が巻き起こすこっけい噺であり、資料1のような構造である。前座噺に分類されることから分かるように、話の内容が比較的単純である。丁稚の定吉は旦那に「本町の平林（ひらばやし）さん」のところへ手紙を持ってお使いに行くようにと言われて店を出るが、うっかり「平林」の読み方を忘れてしまい道行く人に読み方を尋ねて歩く。道行く人は、「タイラバヤシ（「平」の異種訓読）」「ヒラリン（音読）」「イチ・ハチ・ジュウ・ノ・モオク・モオク（漢字の分解読 その1）」「ヒトツ・ト・ヤッツ・デ・トッキッキー（漢字の分解読 その2）」と間違った読み方ばかり教えてくれる。それを習った定吉は、当の平林さんに遭遇しているにもかかわらず、目の前の人物が尋ねるべきおつかい先の主人とは気づかずじまいであるというサゲで締めくくられる。

原型に大きなアレンジを施す必要が無く、恐らく幼児にも容易に理解できるものの一つであろうと考え選択した。また、終盤に「タイラバヤシか、ヒラリンか、イチ、ハチ、ジュウ、ノ、モオク、モオク、ヒトツ、ト、ヤッツ、デ、トッキッキー」と七五調のリズムに乗って歌う箇所があるのでなお良いと考えた。但し、園児は、漢字を学んでいないので「平林」を「タイラバヤシ」「ヒラリン」「イチ、ハチ、ジュウ、ノ、モオク、モオク」「ヒトツ、ト、ヤッツ、デ、トッキッキー」と読み間違えることが面白いという最重要部分を理解できないのではないかという危惧があったが、無用な心配であった。

落語には、名前の読み方を忘れてユニークな

読み方をするという類の噺は、「八五郎坊主」他数演目あり、常套的表現とも言える演目である。川戸2002の中に、1938年生まれの子どもの川戸が、「私がまだジャリだった頃、寄席へいくと必ず誰かがこの噺をやった。（中略）いや寄席へいく前からこの噺を知っていた。子どもでも簡単にわかるため、いっぺんで覚えてしまい『タイラバヤシかヒラリンか、イチハチジュウのモオクモオク、ヒトツとヤッツでトッキッキー』と囃し立てては喜んでいただけだった。つまりこの言い立ては、（中略）子どもでも知っていたほどだったのである。」[川戸2002：254]という記述がある。1940年代～1950年代には「平林」は社会的認知度の高い演目であり、当時の子どもにとっても興味深い音を含んでいることがうかがえる。このことから、幼児が初めて触れる落語として最適な題材であることが分かる。

サゲには数種類あるようで、今回の実践で行ったサゲのほかに、丁稚定吉が道行く人に習った読み方を囃しながら歩いていると面白かった子ども達がついてきて、交番の巡査に「お前は気でも違ったのか」と言われて「いいえ、字が違いました」というものもある[川戸2002：253]。

三代目桂春團治（1930～）が1978年3月10日に東広島市にて収録したのもこの類似サゲである。丁稚定吉が囃しながら歩いている姿を見た人が「けったいなこと言うて歩いているやつがおるで。あんなこと言うやつの気が知れんわ。」と言うのを聞いて、定吉が「わいは字が知れんわ。」と返すものである。

また四代目桂文我（1960～）が2000年9月2日に多治見市で収録したものは、おやこ寄席の為、子ども向きの改変が随所に試みられ冒頭で「平林」の分解読の説明も行われる。サゲの前には、顔なじみの人を登場させ、定吉に「平林」は「ヒラバヤシ」と読むことを思い起こさせる設定を導入し、子ども達にサゲを理解させる工夫をしている。定吉は「ヒラバヤシさんやった、ありがとーありがとー…」と礼を言っている間に、「ありがとーさん」のところへ行くといい違うというサゲにしている。これらの中でも今回のサゲは、より思考力が必要である為、本研究

の目的に適していると考えた。

2.3 落語「平林」鑑賞における園児達の反応

落語「平林」の場面は、大きく分けるとA[旦那と丁稚定吉とのやりとり 序盤]、B[旦那と丁稚定吉との平林家訪問を巡るやりとり(鶯鷓返し)]、C[平林家を目指す丁稚定吉と道行く人々とのやりとり]の3つに分類される。ちなみにB[6]～[9]における鶯鷓返しは省略、簡略化される場合もあるが、本実践では演者である第2著者が、師匠四代目林家染丸(1949～)から伝承したバージョンで行った。「平林」の読み方を丁稚定吉が忘れる原因についても同様である。以下、この3つの場面に分けて考察を行った。

(A) 分析対象

表1②③④⑤の幼稚園訪問演奏会における落語口演部分を分析対象とした。

いずれも年少・年中組と年長組の2群に分けて演奏会を行った。

表1②③の実施園：短期大学附属幼稚園

実施日：2004年2月26日

鑑賞園児数：年少・年中組(93名・127名)

計220名/年長組 129名

表1④⑤の実施園：大学附属幼稚園

実施日：2005年1月24日

鑑賞園児数：年少・年中組(35名・57名)

計90名/年長組 56名

(B) 第1著者による観察

第1著者が、幼稚園訪問演奏会における落語「平林」口演部分の記録ビデオの観察を行った。園児の表情、行動を詳細に記述した。記録カメラは常に移動しながら園児達と演者を様々な方向から撮影しており、会場の様子をなるべく偏りなく記録することができたものと思われる。園児達は、表1②③では全員床に座っており、④では椅子に腰掛けた園児と床に座る園児が半々であった。⑤では全員、椅子に腰掛けていた。ビデオの一部が飛んでしまっているが、短

い時間であるので観察に支障は無かった。

(C) 学生による観察

第3著者が短期大学生に落語を鑑賞する園児達の行動を観察及び評価させた。落語口演を実施した幼稚園とは関連の無い短期大学にて、保育を学ぶ女子学生89名に「平林」の内容を理解させた後、表1④での落語口演の記録ビデオを一斉に鑑賞させながら、園児の反応について「理解」「感動」の尺度で10段階評価をするよう教示した。ビデオを観察しながら資料1[1]～[26]の各場面ごとに「理解」「感動」の評価値を記入し、最後に「園児のどのような鑑賞態度に注目してスコアをつけたか、理解と感動、それぞれについて述べて下さい、感想も書いて下さい」と自由記述も行うよう教示した。実施時期は2006年6月である。

分析の際には、[1]から[26]まで全ての場面について、10段階の評価を記入していたデータのみを分析対象とした。89名中、11名のデータについては、空欄の箇所がある、10段階評価ではなかったなどの理由によって分析対象から除外した。従って78名分のデータを分析対象とした。

(D) 学生による園児の観察における評価基準について

保育系短期大学生78名が評価した資料1[1]から[26]の各場面における園児の「理解」「感動」の平均値の推移は図1に示した。グラフの横軸は、資料1に掲載されている各場面を示しており、縦軸は各場面ごとに、園児の反応を短期大学生が「理解」(○)と「感動」(●)の尺度で評価した値の平均値を示している。

「理解」と「感動」の相関関係は0.54であり、多くの学生が「理解」「感動」双方を類似の基準で評価しているものと推測される。資料2は、学生達の自由記述中のコメントを分類したものである。「理解」「感動」双方の評価基準を「園児の顔の表情、笑い声のトーンや量、笑うタイミング、子どもの発言など」にしたというコメントが26件あった。これに加えて、園児の笑い

声を評価基準にしたというコメントが「感動」30件（「園児の笑い声の量，笑っている表情，身の乗り出し方」），「理解」21件あった。園児が笑っていれば「理解をすることによって感動して笑っていると考えた」というコメントも7件ある。更に，顔の表情を評価基準としたというコメントが「感動」6件，「理解」10件（「園児が演者を注視し，うなずいている表情など」）見られた。多くの学生達が，園児の笑い声や表情によって，園児の「理解」「感動」の度合いを評価したことが明らかである。

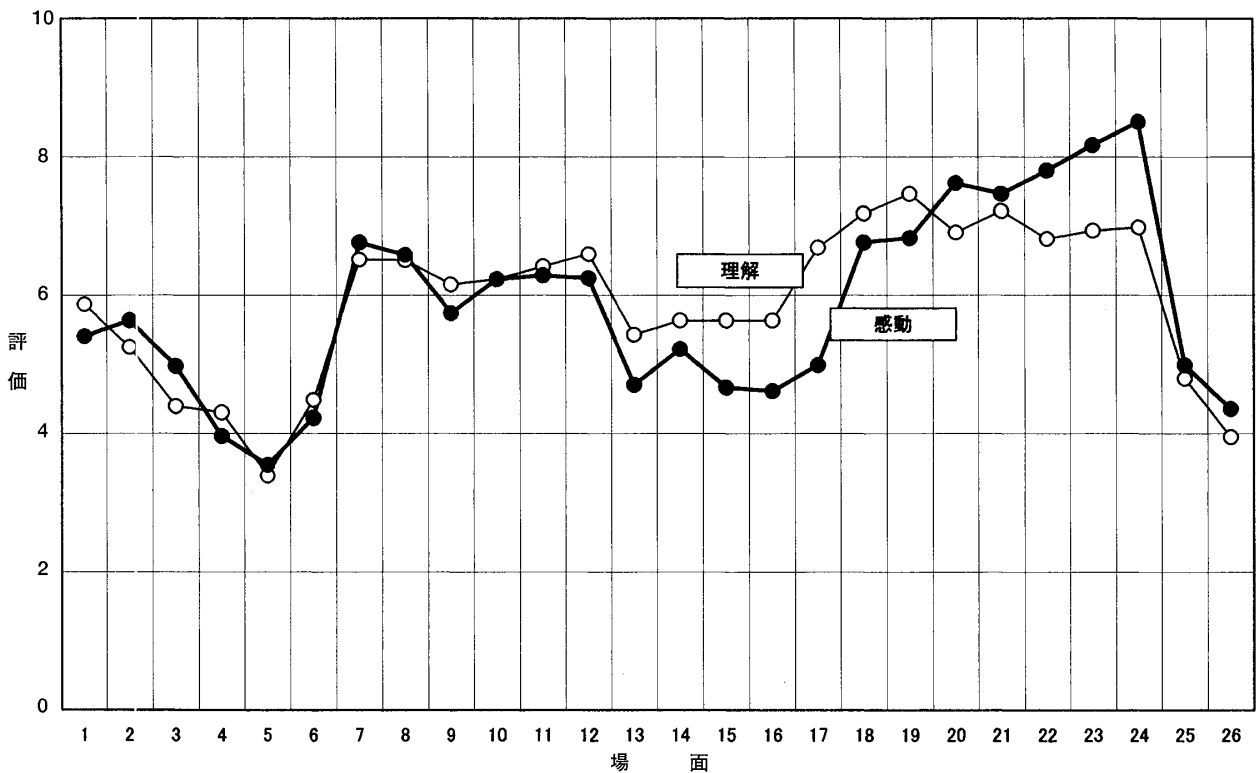
しかし，その一方で，園児達が楽しそうに笑っているからといって，内容を完全に理解してはいないと判断したこと，もしくは疑念を持ったこと，その為，とりわけ「理解」の評価が困難であったことに関するコメントも多い。「園児は落語家の言葉の抑揚や表情などに反応して笑っているが，全てを理解しているわけではないと思われる」（17件），「園児は全てを理解してはいない，または理解していないように

思う，分からない」（6件），「子どもの「理解」や「感動」を正確に把握，区別してスコアを付けるのは難しかった」（12件），「園児は漢字や丁稚という身分について理解していない為，全体は理解できていない」（4件），「園児はわけがわからずにその場の雰囲気ですべて笑っていた」（5件），「園児の笑いや反応と関係なく自分自身の基準を用いた」（6件）などである。

また，園児が笑ってはずかにしている時の映像に関して，理解しようとしていると評価したというコメントと理解していないと評価したという逆のコメントも見られた。

各園児が，実際には当該場面の内容をどの程度の深さで「理解」し，どのような感情を抱いて，どれほど心を揺り動かされて「感動」しているのかは，測定の様子が無く推測の域を出ない。しかしながら，落語を詳しくは知らないが保育に関心の高い短期大学生が，園児の反応を分析した結果である為，少なくとも第1著者以外の人間に，園児がどのように見えたかの貴

図1 短期大学生78名によって評価された落語「平林」鑑賞時における園児の「理解」「感動」の平均値推移
 (○は理解 ●は感動)



重要なデータにはなるであろう。従って、今回、第1著者の観察の参考資料として使用することとした。

(E)【旦那と丁稚定吉とのやりとり 序盤】における園児達の反応

資料1 (A) は、落語の序盤であり、大阪島之内の商家大橋の旦那とその丁稚定吉が登場して、各々の強烈な個性を確立して、客席にそれを印象付ける箇所である。第2著者である演者は、旦那と丁稚定吉の台詞を発する際には顔の角度を微妙に変えて、人物の性格描写を細かく行った。旦那の声を初老の男性らしく低くたく設定し、終始、落ち着いた口調で威厳を持って台詞を発していた。幼い丁稚定吉の声は、ややかん高く細めの作り声で設定し、子ども特有の語り口で台詞を発し、子どもらしさを強調した。

年少・年中組である④では、旦那の第一声「これ定吉！」で既に大きな笑い声が起こった。丁稚定吉が、なかなか返事をしようとせず、旦那の人使いは荒いと散々愚痴ったすえに、呼ばれて6回目によく「へーーーーーい！」と返事をする冒頭の部分で、既に騒然となるくらい園児達は大きな声で笑っていた。特に、④では、旦那の「何を言うてけつかる」の「けつ」の言葉に園児が喜び、興味を示して反応していた。④では記録用のビデオカメラが、この箇所の園児達の様子を後方から撮っている為、細かい表情は分からないが、園児達が賑やかに笑っている様子は後方からもよく分かった。それ以降、④では、旦那と丁稚定吉の言葉の応酬の際、定吉の台詞が発せられるたびに、少し遅れながら大きな笑い声が起こった。

年長組である③⑤では、記録用のビデオカメラが前から園児の表情を撮っている為、園児の表情がよく分かる。園児達は集中して聞いており、④とは異なり、一つ一つの言葉に反応した笑いは起きなかった。第2著者が「おもしろかったら笑ってもかまいません」と言って落語口演を始めたが、冒頭の旦那の台詞では静かにしていた。しかし、丁稚定吉が登場する際の「へーーーーーい！」の返事には大きな笑

い声が起こり、順次それが大きくなっていった。③⑤では、園児達の笑いが起こる反応が④よりもやや敏速である。園児達は、概ね、丁稚定吉の台詞が発せられる際に、より大きく反応して笑っている。

③④⑤いずれの園児達も、第2著者である演者が作り出した特色ある丁稚定吉の声とその独特の言い回し、茶目っ気のあるしぐさに大きく興味を引かれていると推測される。この点については、短期大学生達も「園児は落語家の言葉の言い方、声や表情の変化に反応して笑っている」(47件)と指摘している。

旦那と丁稚定吉の応酬が続く資料1 [3]~[5] に関しては、園児の年齢によって反応に微妙な違いが見られた。[3]において、丁稚定吉は、旦那は大きさに100回呼んだと言うが6回しか呼んでいないではないか、嘘つきは泥棒の始まりだと返す。[4]において、旦那に身体ばかり大きくて役に立たないと言われた丁稚定吉は、「だんだん大きくなるから大人になる。だんだん小さくなったら無くなる。小さいのが好きならローソクに火を点せば良い。」[5]では、「(旦那に「理屈ばかり一人前」となじられ) ご飯は二人前」と屁理屈を並べる。年長組である⑤では共感したような大きな笑い声が起こり、この屁理屈における比較を含む推理がある程度はできているものと推測された。しかし、年少・年中組である④の場合、同箇所への反応が乏しかった。年長組である③では旦那の「100回(定吉を呼んだ)」に異議を唱える大きな声があがったが、それ以降は比較的静かにしていた。園児達は、集中して聞いているのかもしれないので判断は下しにくい。資料2から、笑い声が起こらず静かにしている箇所の園児の反応に対して、短期大学生達の評価の基準が分かれたことが示唆されるが、図1から、[3]~[5]の区間について、笑い声が少ないことから園児の「理解」「感動」ともに低い評価値をつけた学生が多かったことが明らかである。

(F)【旦那と丁稚定吉との平林家訪問を巡るやりとり】における園児達の反応

資料1 (B) は大きく分けると [6]~[9] (おつかい先でのあいさつ練習の際、丁稚定吉が旦那の台詞をまるまる真似る鸚鵡返しの箇所), [10] [11] (丁稚定吉が、旦那さんと呼び捨てにはできないので「大橋さんから参りました」としか言えないと譲らない。旦那から呼び捨てにしても良いと言われると今度は急に態度が大きくなり、旦那への暴言を連発する箇所), [12] [13] (丁稚定吉の物忘れがひどく、行く先や挨拶の文言を覚えられないことを印象付ける、後半の伏線となる箇所) の3箇所に区分される。

年少・年中組である④では、記録用ビデオカメラの角度が後方から前方へと移動し、子どもの表情が観察できるようになった。旦那が丁稚定吉に、平林家に到着してからの挨拶を今から稽古する旨を告げる [6] の最初は静かであった。③④⑤のいずれの園児達も表情は真剣で、演者を注視しており、今から何が起こるのか固唾をのんで見守り集中して聞いているようであった。丁稚定吉は、旦那に「(自分のあとについて) 同じように言って覚えよ」と命じられる。園児達は「口写し (口移し)」という言葉に大騒ぎしていた。丁稚定吉は、「こんにちは、結構なお天気さんでございます。と、さあ言うてみなはれ」、「いらんことは言わいでええのや」、「私、あんたに挨拶を教えますのやで」、「おせえてんのは私やないかい」、「さては主人をバカにしくさる」と旦那の言うとおりにそっくりそのまま復唱する。このように旦那の発する言葉を全てそのままに鸚鵡返ししては叱られる [7] では、定吉の台詞のたびに③④⑤の園児達のいずれも笑い声が大きくなっていった。④では、「なんなん!」という園児の声も上がった。

但し、年長組である③⑤では年少・年中組である④よりも少し反応が早かった。年少・年中組である④では、鸚鵡返しがひとしきり終わった後、旦那が「いらんことはいわいでええのや」と丁稚定吉をたしなめる言葉を聞いてから園児は笑っていたが、年長組である⑤では、丁稚定吉が「こんにちは、結構なお天気さんござい

ます。と、さあ言うてみなはれ」と鸚鵡返しを始めた瞬間、丁稚定吉が旦那の発する言葉を全て模倣している為、旦那を怒らせている事態の状況を把握したような大きな笑い声が起った。年少・年中組である④では、「こんにちは、結構なお天気さんで…」と丁稚定吉の声を聴いた瞬間、大きな笑い声が起った。前の項で指摘したように、④の園児達が笑っているのは演者である第2著者が丁稚定吉の声のトーンを旦那よりも高めに設定して、口調も特色あるように作り、鮮やかに丁稚定吉の人物像を描いている為、むしろその点に興味を引かれた結果である可能性もある。[8] で丁稚定吉が「口写しはおもしろいでんな、しまいに頭のどつきあい」と発する際にも大きく反応している。

続く [10] [11] では、③④⑤のいずれも同様の反応を示している。丁稚定吉は、旦那から「私は島之内の大橋から参りました」と言うようにと習うが、旦那を「大橋」と呼び捨てにできないからと「大橋さんから参りました」と何度も言う。この丁稚定吉の挨拶練習の際、「私は大橋さんから参りました」と発した瞬間、園児のあいだから大きな笑い声が起った。⑤では「めっちゃ面白い」と叫んでいる園児もいた。④でも、「大橋さん」という台詞を聞いてすぐに反応した園児もいた。旦那から、呼び捨てにして良いと言われて、丁稚定吉が急に気が大きくなって「ほな大橋」「大橋この頃歳いって禿げてきたな」と言うくだけでは、「はげ」という言葉に③④⑤の園児全員が喜んでいた。「面白いなあ」と④から声が上がった。また⑤では、奇声を発して椅子から笑いながら転げ落ちている園児が数名見られて、しばらく騒然とした。

[12] では、丁稚定吉が「どこへ行ったらよろしいんで?」「ほんで、なんちゅうて行ったらよろしいんで」となかなかおつかい内容が覚えられずに2、3回同じ質問をしつこく旦那に繰り返す。そのたびに、おかしさが増すのか園児達の大きな笑い声が上がった。

短期大学生の観察では、[7] の口写しの話や鸚鵡返しが始まった途端、評価の平均値が「理解」では4.48から6.52へ、「感動」では4.22

から6.77にはねあがっている。それ以降 [12] で「どこへ行きまんの？」と何度も丁稚定吉が旦那に聞き返すところまでの、鸚鵡返しが行われて、丁稚定吉が台詞を発する箇所では、「理解」では6.16～6.6、「感動」では5.74～6.58とやや高めの評価の平均値が横ばい状態が続いている。これは、園児達が賑やかに笑っていることから、「理解」「感動」双方の評価を高くつけた学生が多かったことを物語っている。[13]の評価値が下降しているのは、旦那のみの台詞による箇所であり、園児達の笑いが起きなかったことが原因であろう。

(G)【平林家を目指す丁稚定吉と道行く人々とのやりとり】における園児達の反応

資料1 (C) は大きく分けると [14] [15] (おつかいに出かけた丁稚定吉が、他のことに注意を逸らした為、肝心の「平林」の読み方を忘却してしまう、その後の展開のきっかけ)、[16]～[24] (途方にくれた丁稚定吉が、旦那が持たせてくれた手紙の宛名書き「平林」の読み方を道行く人にたずねたところ、様々な違う答えが4種返ってきて翻弄される) [25] [26] (当の平林さんと遭遇し、「ひらばやし」と名乗られているにも関わらず、先ほどから道行く人に習った読み方を復唱したところ、そのどれとも違う為、目の前の人物が尋ねるべき相手であることに全く気づかないというサゲ) の3つに区分される。

④の記録用ビデオカメラは、前方から園児の表情を撮っており、[14] [15] で園児達が集中して聞いている様子が窺えた。お使いに出て以来、先方の名前を忘れないようにとずっと「ヒラバヤシさん、でっせ～」を連呼していた丁稚定吉が、道行く人に信号に気をつけよと注意を促されて、信号のことに関心を向け、「平林」から気持ちを逸らしてしまう。その直後に、肝心の「平林」の読み方を忘れたことに気がついて、「あっ!!!」と叫ぶところで、年少・年中組である④の園児達は何が起こったのか固唾をのんで見守っているように静かになり、その後、しばらく静かにしていた。年長組である③

⑤の園児達からは、丁稚定吉が「あっ!!!どこいったらええか分からんようになってしまった!」と言った瞬間、大きな笑い声が起った。また、[15]での「赤はとまれでっせー、青はわたれでっせー」と言う丁稚定吉の言葉にも笑っていた。

[16]～[24]では、③④⑤の園児達は同様の反応を示した。まず、[16]で、丁稚定吉が「タイラバヤシ」と道行く人に教えてもらった際には、年少・年中組である④から「ええ? (違う)」という声が上がった。年長組の⑤では、園児達は「タイラ」と聞いた瞬間に「違う! 違う!」と口々に連呼していた。その後、[17]で、第2著者が歩行のしぐさをしながら「タイラバヤシさん、でっせ～」と連呼すると園児のあいだから「違う! 違う!」「ヒラバヤシ!」と何度も声が上がった。

次に [18] で、丁稚定吉が道行く人から「ヒラリン」と習った瞬間にも、「違う! 違う!」と大きな声が起こり、また [19] で、演者が歩行のしぐさをしながら「ヒラリンさん、でっせ～」と連呼した際には、「違う! 違う!」「ヒラバヤシや～」と更に大きな抗議の声が上がった。演者である第2著者が、園児に向かって「違うなあ」と言う度に、うなずいて同意を表している園児も多かった。

次に [20] で、丁稚定吉が道行く人から「イチ、ハチ、ジュウ、ノ、モック、モック(「平林」の分解読 その1)」を習うが、園児達は「イチ」と聞いた瞬間に「えー!」「違うー!」と声を上げた。その後、演者が「ハチ」「ジュウ」とひとつひとつの音を発する度に園児達から大きな抗議の声が上がり、[21]で「イチ、ハチ、ジュウ、ノ、モック、モック」と全部聞いた瞬間に、ここまでの最大の笑い声が起きた。年長組である⑤では椅子から笑いながら転げ落ちる園児が多数いた。③は全員床に座っていたが、笑いながら転げまわっていった。

更に、[22]で丁稚定吉が、道行く人からもっともらしく教えてもらったのが「ヒトツ、ト、ヤッツ、デ、トッキキキ(「平林」の分解読 その2)」である。ここでは全体での最大の笑

い声 that 起き、⑤では、「笑いながら椅子から転げ落ちる」という動作が連鎖していく様子が見られた。③でも転げまわる様子が派手になっていった。

[23] では、教えてもらった読み方を最初から丁稚定吉が何度も復唱し、[24] で「タイラバヤシか、ヒラリンか、イチ、ハチ、ジュウ、ノ、モオク、モオク、ヒトツ、ト、ヤッツ、デ、トッキッキー」と七五調のリズムに乗せて歌い出す箇所では園児達が「違う！違う！」と騒然としていた。特に、「イチ、ハチ、ジュウ、ノ、モオク、モオク」で笑い声が増幅し、「ヒトツ、ト、ヤッツ、デ、トッキッキー」でそれが爆発するような印象であった。これが4、5回同じように繰り返された。⑤の園児達は、笑って椅子から大げさに落ちるといった動作を繰り返していた。

しかし、[25] [26] で、当の平林さんが登場し、丁稚定吉の目の前にいるにもかかわらず、全く気がつかないという最終的なサゲには極めて反応が薄かった。当の平林さんの前で、丁稚定吉が道行く人に習った「平林」の読み方を全て復唱してみせる「タイラバヤシか、ヒラリンか、イチ、ハチ、ジュウ、ノ、モオク、モオク、ヒトツ、ト、ヤッツ、デ、トッキッキー」と七五調で歌うところには、先と同様の大きな笑い声が起こっているが、「ああ、あんたと違うワ」とつぶやくサゲの箇所では、水を打ったように静まりかえってしまった。しかし、終了後、「おもしろかった！」と何人もの園児が手を挙げて発言し、④では「もう一回やって！」という要望が大きな声で園児からあがっていたほどである。

短期大学生達は、④の園児達の反応を評価している。[14] [15] [16] では、園児達の笑いが起きなかったことから、「感動」の評価の平均値は [13] で4.7に下降した後、4.61~5.22と横ばい状態となっている。しかし、[17]~[24] の丁稚定吉が道行く人に「平林」の読み方を教えてもらい、それを大声で復唱する区間では「感動」の評価の平均値は、4.99から8.51へと順次上昇していった。「タイラバヤシ」「ヒラリ

ン」「イチ、ハチ、ジュウ、ノ、モオク、モオク」「ヒトツ、ト、ヤッツ、デ、トッキッキー」と違った読み方を新しく習うたびに、園児の笑い声の量は確実に増幅していった。これを「感動」の評価基準とした学生達が多いことを物語っている結果であろう。

一方、「理解」の方は、[13]~[16] の区間は5.43~5.64、[17]~[24] が6.69~7.47の評価の平均値で横ばい状態である。前者よりも後者の区間の値が高いのは、笑い声の量に影響されているからであろうと推測される。資料2では、「理解」の評価の観点として「理解をすることによって感動して笑っていると考えた」というコメントが多く見られた。但し、短期大学生達は、園児が漢字を読めないことに思いをはせているのであろう。園児達は、丁稚定吉が「ヒラバヤシ」ではない読み方を次々に習っていることを理解して、抗議の発言をし、笑っているが、漢字の分解読みをしていることを、恐らく理解できていない、つまり全てを理解できていないのではないと判断して「理解」の評価値をつけているものと推測される。「園児は落語家の言葉の抑揚や表情などに反応して笑っているが、全てを理解しているわけではないと思われる」というコメントも多かった。

短期大学生達は [25] [26] のサゲでは、笑い声 that 起きないため、園児達がサゲにほとんど気がついていないと判断しているようだ。評価の平均値は、「感動」では4.99、4.35、「理解」では4.79、3.95とともに低い値となっている。しかし、一方で「オチで（園児が）笑っているので驚いた」とコメントした学生もあつた。

3. 考察一園児の落語「平林」鑑賞から見出されるもの

3.1 言葉の音響的、音楽的側面への園児達の強い興味

荒川・林家2007でも指摘したが、園児達は演者の声の抑揚、言い回しに実に敏感である。落語「平林」の場合、演者が状況説明を行う箇所は極めて少なく、主に、丁稚定吉と旦那、その他の登場人物との会話によって話が進められる。

丁稚定吉が言葉を発するたびに、園児のあいだから大きな笑い声が起っていた。園児達は、第2著者である演者が作り出した定吉の特色ある声（旦那よりも高めに設定）とその独特の言い回し（落語で子どもを演じる特有の口調）、茶目っ気のあるしぐさに大きく興味を引かれていると推測される。園児が内容を理解していると著者らが考えている箇所でも、園児は単に演者の発する日本語の音響的側面に興味を引かれて反応しているだけという可能性もある。

しかし、このことをネガティブに考える必要はないであろう。演者の声に含まれている様々な情報（演じている人物の年齢、男女の別、人となり、その時に表現している人物の感情など）を園児が受け取り、園児なりの解釈で、想像の世界を広げていくきっかけが作ればそれで良いのではないだろうか。落語は演者が1人で、同じ衣装のまま、何人もの登場人物を演じ分ける世界でも珍しい芸能形態である。演者の声から発信される音情報をいかに読み解き、想像を膨らませて、脳内にいきいきとした人物像を自ら作り上げ、豊かな創造的世界を描きうるかと言うことが、落語鑑賞の重要な鍵とも言えるのである。

また、園児達は、日本語の音楽的側面（言葉に含まれるリズム、七五調、イントネーションによる旋律的要素他）にも極めて敏感である。丁稚定吉が道行く人に「平林」の読み方を「タイラバヤシ」「ヒラリン」「イチ、ハチ、ジュウ、ノ、モオク、モオク」「ヒトツ、ト、ヤッツ、デ、トッキッキー」と新しく習うたびに、園児の笑い声の量は確実に増幅していく。特に、「イチ、ハチ、ジュウ、ノ、モオク、モオク」と「ヒトツ、ト、ヤッツ、デ、トッキッキー」が好まれ、非常に大きな笑い声が起こる。園児は、これらの読み方が「平林」を分解して読んだものであることは知らないであろう。しかし、大人がおかしがるそのことを知らなくても、「モオク、モオク」など発音とリズムのおもしろさや、演者が甲高い声で尻上がりの抑揚を強調して言い放つ「トッキッキー」の口調に強く興味を引かれるのであろう。[24]で、丁稚定吉が「タイラ

バヤシか、ヒラリンか、イチ、ハチ、ジュウ、ノ、モオク、モオク、ヒトツ、ト、ヤッツ、デ、トッキッキー」と七五調のリズムに乗せて歌い出す箇所では、「イチ、ハチ、ジュウ、ノ、モオク、モオク」で笑い声が一段と増幅し、「ヒトツ、ト、ヤッツ、デ、トッキッキー」で笑いの最高潮を迎える。これを4、5回繰り返すが、毎回同じ反応である。園児の興味の順やその強さを示す結果となっている。

この七五調で歌われる箇所は、大中恩（1924～）が落語からインスピレーションを受けて、〈平林〉という作品を作曲した際に、リズムや旋律を落語口演の原型に近づけてかたどっている。このことから非常に音楽的な部分であると言えよう。「マザーリーズ」と呼称されるイントネーションを強調した母親の語りや、乳児にとって興味を引く音声パターンであることが知られている。上記の園児の反応は、この傾向や、山崎2005、岡林2006、2007に示されている母親と乳幼児とのやりとりや乳幼児の表現における音声パターンの傾向とも関連する可能性が考えられる。今回はできなかったが、今後、演者の音声の音響分析を行い、園児の反応との対応関係を調べれば、より興味深いデータを提示できるのではないかと考えている。

他に、落語鑑賞の本質的な部分ではないが、園児は、興味深い単語には大きな反応を示す。年齢が低いほど、その傾向は強いように思われる。本実践の場合は、「けつ（かる）」「口移し（口写し）」「はげ」などでその傾向が見られた。特に、[11]において、旦那から、呼び捨てにして良いと言われた丁稚定吉が、急に気が大きくなって「ほな大橋」「この頃歳いって禿げてきたな、大橋」と言うくだりで、年少・年中組では同様に「はげ」という言葉に異様に大きく反応し、奇声を発してしばらく騒然とするほどであった。年長組では、年少・年中組よりは園児は落ち着いてみえるが、同様に「はげ」の単語を非常に喜んでいる姿が見られた。

3.2 園児の思考力、想像力及び創造力の育成について —鑑賞教材としての適切さ

落語「平林」鑑賞における園児達の反応から、この演目は園児達に無理なく受け入れられたと推測できた。落語「平林」は、ストーリーが単純明快である。「島之内の大橋さんちの丁稚定吉が、本町の平林さんのところへ手紙を持っておつかいにやらされ、「平林」の読み方を忘れた為、道行く人に手紙の宛名書きを見せてその読み方を訪ね歩く」という縦糸に、旦那や道行く人々、当の平林さんとの愉快なやりとりが横糸としてからんでいるだけである。登場人物は少ないとはいえないが、丁稚定吉と旦那が話の中心であり、それ以外の道行く人達（4名+巡查）と「平林さん」は、一瞬ずつしか登場しない為、園児の頭の中で、恐らく人物や場面に関する矛盾や混乱は起きないであろう。園児の鑑賞教材として、適切な難易度であろうと考えられた。桂雀々2001、桂文我2006、関原2006でも分かるように上方落語協会、三栄企画、桂文我他、親子寄席や学校寄席の企画を行い、子ども達に落語を聞かせる活動を展開している例がある。今後、園児に落語を聞かせる場合には、これらの活動を記録したCDや活動報告、関連文献も参考にしていきたい。

本研究では、落語鑑賞時における園児の反応の分析を通じて、園児の思考力、想像力に年齢による差異がしばしば見られ興味深かった。該当箇所を次に列挙する。年長組では、落語「平林」で提示される、比較を含む推理や、丁稚定吉の言動、行動の意味をかなりの程度理解できていたようであった。年少組では、反応が年長組よりも遅い箇所がしばしばあった。年少・年中組は、ある程度は理解できているが、年長組ほどには理解できていないのではないかと推測した。また反対に、年少・年中組でも十分に理解できる内容も含んでいた。その該当箇所も次に列挙した。

年齢による差異がやや見られた箇所

・資料1の[3]～[5]において、「(旦那に「100回呼んでも来ない」となじられて、)6回し

か呼んでいないのに、嘘つきは泥棒の始まり」、
「(旦那に身体ばかり大きくて役に立たないと言われて)だんだん大きくなるから大人になる。だんだん小さくなったら無くなる。小さいのが好きならローソクに火を点せば良い。」「(旦那に「理屈ばかり一人前」となじられ)ご飯は二人前」と屁理屈を返す丁稚定吉の言葉に対する園児の反応。年長組は賑やかに笑っていたが、年少・年中組では静かであった。

・[7]において、丁稚定吉が、旦那の言葉を復唱して挨拶の練習をせよと言われて、「こんにちは、結構なお天気さんでございます。と、さあ言うてみなはれ。」と鸚鵡返しを始めた瞬間の園児の反応。年長組では、この瞬間に何が起こったのか理解できたようで笑っていたが、年少組は、もう少し話が進み、旦那が怒り出してから事態が理解できたようだった。

・[15]において、お使いに出た丁稚定吉が、ほかのことに気を逸らした直後、肝心の「平林」の読み方を忘れたことに気がついて、「あっ!!!どこいったらええか分からんようになってしもうた!」と言った瞬間の園児の反応。年長組では即座に大きな笑い声が起こったが年少・年中組では静かに聞いていた。

年齢による差異が見られなかった箇所

・[10]において、丁稚定吉の挨拶練習が仕切りなおして再開され、丁稚定吉が「私は大橋さんから参りました」と発した瞬間、園児の間から大きな笑い声が起こった。年少組の場合でも「大橋さん」という台詞を聞いてすぐに反応した園児もいた。

・[16]～[22]において、丁稚定吉が道行く人に「平林」の読み方をたずねて、「タイラバヤシ」「ヒラリン」「イチ、ハチ、ジュウ、ノ、モオク、モオク(「平林」の分解読 その1)」「ヒトツ、ト、ヤッツ、デ、トッキッキー(「平林」の分解読 その2)」と習うそれぞれの瞬間と、そのつど歩行のしぐさをしながら連呼する箇所に対する園児の反応。いずれも「違う!違う!」と大きな抗議の声が上がり、笑っていた。

・[25][26]において、丁稚定吉は当の平林

さんが登場し、目の前にいるにもかかわらず、全くそれに気がつかないという最終的なサゲに対する園児達の反応。いずれも極めて反応が薄かった。

当初、「平林」の読み方に関しては、園児達は漢字を学んでいないので、意味が伝わらないのではないかと危惧していたが無用な心配であった。丁稚定吉が道行く人から新しく習う読み方を発すると、園児達は、その音と丁稚が中盤でさんざん発していた「平林（ひらばやし）」の音とを比較参照し、「誤読である」と理解していた。しかし、園児達は、漢字が読めない為、「イチ、ハチ、ジユウ、ノ、モオク、モオク」「ヒトツ、ト、ヤッツ、デ、トッキッキー」が、漢字の分解読であることは理解していないであろう。そのことは園児の鑑賞活動では、それほど問題にしなくても良いと考える。最終場面で当の平林さんが登場し、丁稚定吉が道行く人に習った「平林」の読み方を全て復唱してみせ七五調で歌うところには、大きな笑い声が起きているにもかかわらず、「ああ、あんたと違うワ」とつぶやくサゲの箇所では、水を打ったように静まりかえってしまった。園児達は、丁稚定吉が何のためにおつかいにやらされたのかを忘れてしまったのか、もしくは定吉の言う「あんた」が当の平林さんである、今、まさにその平林さんが丁稚定吉の目の前にいるという状況を推理、想像して理解することができなかつたのであろうか。この箇所では落語「平林」の中で最も複雑な思考が要求されるので、園児にはこの部分のみ難易度が少し高かつたのであろうと推測する。今後は、思考の発達の視点からも様々に検討していければと考えている。

おわりに

荒川・林家2007では、ハメモノの豊富な上方落語「七度狐」を園児に鑑賞させた活動を分析したが、やや複雑な「七度狐」よりも「平林」の方が、園児達は話を理解できている割合がかなり高いように感じられた。しかしながら、荒川・林家2007で指摘したが、園児が落語の全容

を理解できなくても、大人になれば暗黙のうちに自制する「演者への話かけ」を制さずに鑑賞を行い、理解できる部分を園児なりの楽しみ方で聞くことには十分に意義があると考えている。古典芸能文化の継承という観点もさることながら、論理的思考力、推理力の育成に加えて、演者の声や表情の持つ感性情報を受け取り、しぐさ、扇子、手ぬぐいなどによる切り詰められた情報から想像力によって豊かな創造の世界を頭の中に構築し、表象、表現力を育成することができるといった観点から園児の落語鑑賞は大いに推奨できるものと考えている。情報過多、雄弁な映像の世界に慣れている園児達にとって、記号の多い落語の世界を体験することは、新鮮で貴重な経験となりうることであろう。

謝 辞

コンサート及び幼稚園訪問演奏会実施に当たって、御協力頂いた京都女子大学附属京都幼稚園 山本聰美先生と園の皆様、大阪薫英女子短期大学附属かおり幼稚園 竹森洋子先生並びに園の皆様、御出演頂いた上方落語協会噺家 桂つく枝氏、笑福亭喬若氏、寄席三味線方 吉崎律子氏、吉川絹代氏、ヴィオリニスト 蛭田真衣子氏、ピアニスト 浅井真紀子氏、村田睦美氏、調査・研究に御協力頂いた落語プロデューサー 長沢利文氏、京都女子大学落語研究会元会員の栗原綾子氏、近藤貴子氏、藤谷さよ氏、渡辺美緒氏に感謝致します。

【参考引用文献】

- 荒川恵子 2004「幼児の鑑賞指導に関する一考察—鑑賞指導研究会MEBAEの幼稚園訪問演奏活動の分析—」関西楽理研究会発行『関西楽理研究』第21号：1-20.
- 荒川恵子・林家染雀 2007「幼児の邦楽鑑賞教材としての上方落語の可能性—落語「七度狐」を中心に」関西楽理研究会発行『関西楽理研究』第24号：15-36.
- 市川伸一編 2003『認知心理学4 思考』東京大学出版会
- 岡林典子 2006「乳幼児の音楽的成長過程に関する研究—話し言葉・運動動作の発達との関わりを中心に」神戸大学博士論文
- 岡林典子 2007「第5章 認知と表現の発達—誕生から幼児期まで」難波正明, 小林公江, 川口千代編『表現の文化と教育』オブラ・パブリケーション：138-160.
- 桂雀々 2001「笑いは心の栄養—<学校落語>公演で感じること」日本児童文化研究所編『子どもの文化』第33巻第2号：4-9.
- 桂文我 2006「子ども向け落語の本」『児童文学』第52巻第5号：60-63.
- 河合隼雄・養老孟司・筒井康隆 2005『笑いの力』岩波書店
- 川戸貞吉 2002「平林」『落語大百科』第4巻 冬 青社：253-255.
- 角谷正樹 2004「Le's Try! 総合学習 上方落語 通じ大阪弁を学習 大阪市立玉川小学校」『内外教育』：8.
- 関原美和子 2006「インタビュー フロントランナー 第23回 落語家 桂文我さん「おやこ寄席」で子どもも大人も楽しい時間を」『悠：月刊haruka/ぎょうせい』ぎょうせい 第23巻第2号：35-37.
- 中島英雄 2005『脳を鍛える大人の落語』きこ書房
- 橋本憲尚 2007「象徴遊び」中島義明他編『心理学辞典』有斐閣：412.
- 波多野誼余夫編 2003『認知心理学5 学習と発達』東京大学出版会
- 正高信男 2007「マザリーズ」中島義明他編『心理学辞典』有斐閣：808.
- 山崎晃・竹島ゆかり 1985「論理的思考能力の発達と訓練」『滋賀大学教育学部紀要 人文社会科学 教育科学』第35巻：55-64.
- 山崎晃男 2005「子どもの心と音楽」塩見慎朗・長男和英編著『愛の子育て 子ども学のすすめ』昭和堂：169-187.
- 山崎晃男 2007「推論」中島義明他編『心理学辞典』有斐閣：465-466.
- 山内志朗 2007「第2日 落語はなぜ面白いのか—コミュニケーションの多層性」『哲学塾<畳長さ>が大切です』岩波書店：15-30.

《楽譜》

- 大中恩 1962『平林』（落語「平林」より）カワイ出版
- 大中恩 2003『大中恩男声合唱曲集』キックオフ出版

《URL》

- 社団法人 上方落語協会公式ホームページ
<http://www.kamigatarakugo.jp/>
 (2007年11月6日閲覧)
- 三栄企画公式ホームページ
<http://www2gol.com/users/s.kikaku>
 (2007年11月6日閲覧)
- 桂文我公式ホームページ
<http://www.katsurabunga.net/>
 (2007年11月6日閲覧)
- 林家染丸公式ホームページ
<http://www.sutv.zaq.ne.jp/somemaru/>
 (2007年11月6日閲覧)
- 柳家花緑公式ホームページ
<http://www.me-her.co.jp/karoku/>
 (2007年11月6日閲覧)

参考AV資料

《CD》

- 『ビクター落語 上方篇 三代目 桂春團治 親子茶屋/月並丁稚/有馬小便/平林』(VZCG-262) ※『平林』は、1978年3月10日 東広島市にて収録
- 『桂文我 おやこ寄席 ライブ1~5』APPカンパニー (APP-5001)
- 『桂文我 おやこ寄席 ライブ6~10』APPカンパニー (APP-5002)

《DVD》

- 『花緑・きく姫の落語がいっぱい』柳家花緑, 林家きく姫出演 TDKコア 1~3
- 『にほんごであそぼ 萬齋まんさい』野村萬齋他出演 NHK DVD (NSDS7953)

資料1 園児達に聞かせた落語「平林」の構造

(A) 旦那と丁稚定吉とのやりとり 序盤

- [1] 大阪島之内の商家大橋の旦那が「これ定吉！」と丁稚の定吉を呼ぶ。
- [2] 定吉は、朝から晩までこき使われて、雑巾なら擦り切れるところだと旦那の人使いの荒さを愚痴り、5回目までは無視し、6回目によく返事をする。
- [3] 旦那に「100回呼んでも来ない」となじられて、定吉は、「6回しか呼んでいないのに、嘘つきは泥棒の始まり」だと減らず口を叩く。
- [4] 旦那に、身体ばかり大きくて役に立たないと言われ、定吉は、「だんだん大きくなるから大人になる。だんだん小さくなったら無くなる。小さいのが好きならローソクに火を点せば良い」と屁理屈で応酬する。
- [5] 旦那に「理屈ばかり一人前」と言われて、定吉は「ご飯は二人前」とすかさず返す。

(B) 旦那と丁稚定吉との平林家訪問を巡るやりとり

- [6] 旦那は、定吉に、本町の平林（ひらばやし）さんのところお使いに行くように命じ、「こんにちは。結構なお天気さんでございます。委細はお手紙で。」と言って、先方に手紙を見せるように言い、口写しで、この挨拶を稽古させようとする。
- [7] 定吉は、「口写し」を「口移し」と勘違いして気持ち悪がりながらも、挨拶だけでなく、「いらんことは言わいでいいわ」「おせえてんのは私やないか」「さては、旦那をなぶっとるな」「おのれ、そのうちいたぶるぞ」など旦那が発する言葉の全てを次々に模倣して、旦那を怒らせる。
- [8] とうとう旦那に叩かれるが、それも模倣して旦那を叩き返す始末である。
- [9] 旦那に、「もう一度、挨拶だけ真似よ」と叱られ、稽古は、仕切りなおして再開される。
- [10] 定吉は、今度は、「私は島之内の大橋から参りました。」と言うところを、「丁稚が旦那さんと呼ば捨てにはできません。」と言い出す。
- [11] 旦那に、呼び捨てにしても良いと言われて、定吉は、急に態度が大きくなり「大橋、この頃、禿げてきたな」「大橋、お茶でも飲もか」など、暴言を連発して、旦那を怒らせる。
- [12] 定吉は、物忘れが激しくて、旦那が、「平林さんのところへおつかいに行け」と言っているのに、習った直後から忘れてしまい、「どこへ行きますの？」と何度も聞き返し、なかなか覚えられそうに無い。
- [13] 旦那は、覚えられないなら、手紙のあて名の「ひらばやしさん」を口の中で唱えながら歩いて行くように言う。

(C) 平林家を目指す丁稚定吉と道行く人々とのやりとり

- [14] 定吉は、旦那に教えられた通りに「ヒラバヤシさん、でっせ〜」を繰り返しながら歩いていたころ、巡査に、「これ子ども！信号に気をつけよ！」と注意を促される。
- [15] 定吉は「赤は止まれでっせ〜、青は渡れでっせ〜」と「ヒラバヤシ」から注意を逸らしてしまい、うっかり名字の読み方を忘れてしまう。
- [16] 定吉は、道行く人(1)に、旦那が書いてくれた紙を見せて、「タイラバヤシ」と読むと教えてもらう。
- [17] 定吉は、「タイラバヤシでっせ〜」と繰り返しながら、旦那が言っていた名字とは違う気がしてくる。
- [18] 定吉は、道行く人(2)に、それは「ヒラリン」と読むと教えてもらう。
- [19] 定吉は、「ヒラリンでっせ〜」と繰り返しながら、やはり違う気がしてくる。

- [20] 定吉は、道行く人(3)に、それは「イチ、ハチ、ジュウ、ノ、モオク、モオク」と読むと教えてもらう。
- [21] 定吉は、「イチ、ハチ、ジュウ、ノ、モオク、モオク」と繰り返しながら、やはり違う気がしてくる。
- [22] 定吉は、道行く人(4)に、それは「ヒトツ、ト、ヤッツ、デ、トッキッキー」と読むと教えてもらう。
- [23] 定吉は、不信がりながらも「タイラバヤシでっせ～、ヒラリンでっせ～、イチ、ハチ、ジュウ、ノ、モオク、モオク、ヒトツ、ト、ヤッツ、デ、トッキッキー」と教えてもらった読み方の全てを繰り返す。
- [24] 「タイラバヤシか、ヒラリンか、イチ、ハチ、ジュウ、ノ、モオク、モオク、ヒトツ、ト、ヤッツ、デ、トッキッキー」と七五調のリズムに乗せて歌まで歌いだす。
- [25] そこへ当の平林さんが現れて、「島之内の大橋さんのとこの丁稚どんやないか、どこへいきなさる？」と聞く。
- [26] 定吉は、道行く人に教えてもらった名字を全て確認してから、「ああ、あんたと違うわ」と言う。

資料2 学生の自由記述に見られるコメント内容

コメント内容の要約につけられた数字はコメント件数を表す。()内の言葉はコメント中の特色のあるものを示す

(1) スコアのつけ方に関するコメント

「理解」「感動」双方のスコアをつける際、高く評価したもの

- ・園児の顔の表情、笑い声のトーンや量、笑うタイミング、子どもの発言など 26
(ほぼ全員笑っていれば理解も感動も10とつけた 1 / 笑っている園児と笑っていない園児の比率にも注目した 1)

「感動」のスコアをつける際、高く評価したもの

- ・園児の笑い声の量、笑っている表情、身の乗り出し方 30
- ・園児の顔の表情 6
- ・真剣にきいている様子 2 (演者を注視 2)
- ・園児が立ち上がったたり、揺れたり、床を叩く様子 3
- ・「平林」の読み方が正解でない時に園児が発する「違う」という言葉 4

「理解」のスコアをつける際、高く評価したもの

- ・「平林」の読み方が正解でない時に園児が発する「違う」という言葉 29
- ・園児の笑い声 21 (理解をすることによって感動して笑っていると考えた 7)
- ・園児が演者を注視し、うなづいている表情など 10
- ・園児の笑いや反応と関係なく自分自身の基準を用いた 6

(2) 「理解」に関するコメント

- ・園児は落語家の言葉の抑揚や表情などに反応して笑っているが、全てを理解しているわけではないと思われる 17
- ・園児は全てを理解してはいない、または理解していないように思う、分からない 6
- ・子どもの「理解」や「感動」を正確に把握、区別してスコアを付けるのは難しかった 12
(理解のスコアが難しい 1 / 感動のスコアが難しい 2)
- ・園児は漢字や丁稚という身分について理解していない為、全体は理解できていない 4
(何一つわかっていない 1)
- ・園児はわけがわからずにその場の雰囲気の中で笑っていた 5
- ・園児が笑ってはず静かな時は理解しようとして考えているものと解釈した 2
(続きを聞きたいと思っていると解釈し理解のスコアを [10] にした 1)
- ・園児が笑ってはず静かな時は理解していないと考えた 1
- ・理解と感動はほぼ比例している 2
- ・園児にとって難しい言葉、なじみの薄い言葉には反応が薄かった 2
- ・[2], [5], [25], [26] は反応が乏しく理解できていないと思われる 2
- ・[15]~[22], [23], [24] はよく理解できてよく笑っていた 10
- ・鸚鵡返し箇所は理解して感動していると考えた 1
- ・定吉が旦那のマネをしているところは理解している 1
- ・旦那を呼び捨てにできず「大橋さん」と言っているくだりは理解できていないと思われる 1
- ・笑っているからといって理解していることになるのかが分からなかった 1
- ・理解していないが楽しそうにしている箇所が多い 1

- ・理解と感動は話の理解のしやすさに左右されると感じた 1
- ・理解は後半になるにつれて下がっているように感じた 1
- ・説明が長く難しい場面では園児の反応が乏しかった 1
- ・園児が静かにしている時は、話を聞いて理解しているのか、理解できなくて反応できないのか（その都度）自分で判断した 1
- ・園児が静かにしているときを [3], 暇そうにしているとそれ以下、楽しそうにしていればそれ以上の値をつけた 1

(3) 園児の反応傾向に関するコメント

- ・園児は落語家の言葉の言い方、声や表情の変化に反応して笑っている 47
（一人二役で旦那の言葉を繰り返す鸚鵡返し箇所、声のトーンが変わる「トッキッキー」や「ハゲ」という言葉によく反応している 8）
- ・言葉にリズムのある箇所（七五調）を好んでいる 12
- ・園児は繰り返しのフレーズを楽しんで笑っていた 15
- ・オチには反応が無かった、また自分も面白くなかった、分からなかった 16
- ・オチで笑っていたのでおどろいた 1
- ・園児の反応には個人差があった 3
- ・話の佳境に入るにつれて子ども達が集中して聞き入っていた 2
- ・一度面白いと反応がどんどん大きくなった 2
- ・1人が笑うと周囲の園児に連鎖していった 1
- ・園児は笑うべき箇所が分かっているようだった 1
- ・笑っている他の子につられて意味が分からずに笑っている園児がいた 1
- ・落語中に演者に話しかけるのはまだ幼少だから 1
- ・大人とは違う観点で園児独特の反応ポイントが分かった 1
- ・幼児や児童に話す時には、少し大げさに感情をこめることが重要だと考えた 1
- ・山場では理解も感動も大きくなった 1
- ・一人二役に興味を持っている 1
- ・理解と笑う箇所スピードは深く関係 1

(4) 園児の落語鑑賞に関するコメント

- ・子どもには難しいと思う内容でも園児が反応し楽しんでいた、驚いた、意外だった 18
（園児は落語を理解することが難しく、退屈して喋りだすと思っていたが、満面の笑みで真剣に聞いていたので驚いた 1 園児が真剣に聞いていたので驚いた 1）
- ・「平林」は比較的園児にわかりやすかったと思う、園児はほとんど理解していた 4
- ・「平林」は園児には難しいと思う 5
- ・園児に落語聞かせるのは良い試みである 3
（全部分からなくても良い 1）
- ・園児にはもっと分かりやすい演目の方が良い 1

(5) 学生自身の落語に関する感想

- ・落語が自分には（意外に）面白かった 9
- ・落語（「平林」）が自分には難しかった 5

- ・落語を初めて聞いた 2
- ・自分も「平林」を理解した 1
- ・「イチ・ハチ・ジュウ・ノ・モク・モク」が「平林」の分解読みであることがすぐには分からなかった 1
- ・落語に対するイメージが変わった 1
- ・自分ももっと落語を聞きたい 1